



インテグリティを 旨とせよ

経営学部 経営学科教授
経営学部長

原田 保秀

海外の経営者にとって、「あなたはインテグリティ (integrity) な経営者ですね」というのは最高の誉め言葉だそうです。インテグリティは「誠実さ」と訳されますが、さまざまな立場で働く人々に求められる資質・価値観です。

インテグリティの意味を定義するのはとても難しいですが、「一貫した誠実さを持っていること」と私は理解しています。つまり時と場合によって、自らの善悪の判断にぶれが生じないということです。自らのキャリアや利益を犠牲にする場合でも、相手の求めに応じて、利他的な気持ちで、嘘やごまかしなく、尽力することはインテグリティな姿勢と言えるのではないのでしょうか。

さらに、企業のインテグリティといった場合には、法律を守る (コンプライアンス) だけではなく、ステークホルダー (例えば、消費者、株主、取引先、地域住民、従業員など) のことを考え、より幅広い社会的・倫理的責任を果たすことを指します。

聖徳太子が制定された十七条憲法には、「九に曰く、信はこれ義の本なり。事ごとに信あるべし。それ善悪成敗はかならず信にあり」と記されています。「誠実さは正しい道の根本であって、すべての事に誠実でなければならない。善悪や成功失敗の判断にも、必ず誠実さがあるか否かが関係する」と解釈できます。

十七条憲法は、官僚や役人に対する倫理規範というべきものですが、今から約 1500 年前の時代に、すでにインテグリティの重要性について指摘されている点は、聖徳太子がいかに優れたリーダーであったかを示しています。

IBUの学園訓である「誠実を旨とせよ」は、「インテグリティを第1に」というのが私の個人的解釈です。皆さんはどのようにお考えになりますか。



善く生きる

教育学部 教育学科教授
小学校・幼児保育コース主任

石田 陽子

「善く生きた人は幸いである。」これは、私が 30 年以上も前に、16 世紀イタリアのある貴族の書簡を読んでいた時に出会ったことばです。その時は、意味を深く問うこともなくこのように訳したのですが、なぜか心にひっかかることばでもありました。

ある時、この貴族が生きたルネサンスという時代背景を考えると「善く生きる」とは、おそらく、ギリシアの哲学者ソクラテスの畢生のテーマではないかとの気づきが、改めて、このことばの意味を考えるきっかけになりました。「人間にとって最大の善というのは、日々、徳について語ること、(中略)、魂の探究なき生活は人間にとって生きるに値しないものなのである」と述べているように、ソクラテスは与えられた知識を記憶するだけの知ではなく自らの心のなかで吟味し続けた知が真実の知であるとし、

それを求め続けることこそ魂の探求であり「善く生きる」ことにつながると説きました。真実の知あるいは魂の探究などは耳慣れないことばですし、こうした考え方は現代の私たちからは随分隔たったものと思われるかもしれませんが、はたして本当にそうでしょうか。

例えば、努力は大切だとわかっていても実際には、怠ることなく努力し続けるのは容易ではないのが人の常であり、あるいは、知識をうることは容易でも、得た知識を生かすための知恵を持つというのも難しいことでしょう。しかし、努力できる人間になるための心の持ち様や知恵の備わった人になるためにはどうすれば良いかを自らの心に問い続けるとすれば、それは真実を求めることであり、「魂の探求」に通じる行為であるとは言えないのでしょうか。自らを高めるために何をすべきか、自分はどうかあるべきかを問い続けることの重要性は時代を超えて普遍であるからこそ、500 年近く昔に書かれたにも関わらず、「善く生きる」ということばが心に残ったのではないかと思います。

ところで、仏教でも、菩薩の修行道である六波羅蜜のなかに智慧があります。智慧とは心の作用の完全な統一であり、最も大切な修行道とされていますが、智慧とは真実の知に通じるものではないのでしょうか。

❖ 学園訓「礼儀を正しくせよ」について

人文社会学部 日本学科教授
人文社会学部長
矢羽野 隆男



聖徳太子は推古12年(604)に仏教を中心に儒教など中国の思想も取り入れて十七条憲法を制定されました。我々の学園訓はこの十七条憲法に基づいて定められたものです。今回取り上げる「礼儀を正しくせよ」は第四条の「群卿百寮、礼を以て本と為よ」に基づきます。

では十七条憲法の第四条を現代語訳で読んでみます。「もろもろの官吏は礼を基本とせよ。人民を治める根本は必ず礼にある。(中略)官吏に礼が保たれていれば、社会秩序が乱れず、また人民に礼が保たれていれば、国家は自然に治まるものである。」礼は社会の秩序と安寧とを生み出す根本、言い換えれば「和を実現する根本」だと述べているのです。

我々は普段「起立、礼、着席」、「お礼を言う」といった形で礼を行っていますが、そもそもその「礼」とは何なのでしょう。一般的な理解として『広辞苑』を見てみましょう。「①社会の秩序を保つための生活規範の総称。②規範・作法にのっとっていること。③敬意を表すこと。④謝意を表すこと。」礼のもつ多面性がわかりますね。あえて言えば、①②は規範(ルール)・作法(マナー)といった外から人の行為や社会のあり方を整え正すもの(こと)で、外面的な「形」に関すること。一方、③④は敬意・謝意といった他者に対する尊敬や感謝の気持ちで、内面的な「心」に関することです。とはいえ、形と心とは切り離されたものではないでしょう。形に表れない心は他者に伝わりませんし、心のこもらない形は空虚で無意味です。礼とは規範・作法(形)と敬意・謝意(心)とが一体となったもの、それが本来の姿でしょう。

礼の形と心とが一体であることは、「礼(旧字体では禮)」の字源からも窺えます。「禮」という字は、偏の「示」が神に捧げる供物の台(テーブル)、旁の「豊」は高杯(台付きの容器)に盛られた供物で、これらを合わせた、神への畏敬(心)を表す祭祀(形)が原義でした。礼はこの宗教儀礼から発生し、やがて一般社会での規範・作法へと展開しました。神社や寺院で礼拝を行うとき、ただ形だけする方は少ないでしょう。日常生活の礼は言わばその延長です。

仏教でも礼を重んじた例として、『妙法蓮華經(法華經)』(第20常不輕菩薩品)の常不輕菩薩の実践が挙げられます。聖徳

太子も重視した『法華經』の根本にあるのが一仏乘(悟りに至る唯一の教え)、すなわち一切の衆生は等しく仏性(仏となる種子)を備えている」という教えです。身分・貧富・性などによる差別が当たり前だった時代、「みな平等に仏になれる」という教えに人々がどれほど感動したか、想像に余りあります。以下に常不輕菩薩の実践を紹介しましょう。

むかし一人の菩薩(修行僧)があった。この菩薩はあらゆる僧侶や信者に礼拝してこう讃えた。「私はあなた方を深く敬い、決して軽んじません。みな修行によって仏になれるのですから」。しかし、人々の中には心の汚れた者もあって罵った。「この菩薩は何者だ。『みな仏になれる』などと予言するとは、偉そうに」。

こうして菩薩はいつも侮辱され、時には杖で打たれ石を投げつけられた。それでも菩薩は決して怒らず、「あなた方は仏になれるのです」と讃えて礼拝し続けた。人を常に軽んじなかったので、菩薩は「常不輕菩薩」とあだ名された。

やがてこの菩薩に臨終の時が訪れた。菩薩は、侮辱に耐えて礼拝し続けた功德により、身も心も清浄となり、生き返って法華經の教えを説き続けた。この様子を見て、これまで菩薩を侮辱した人々も菩薩を心から尊敬し、「みな仏になれる」という教えを受けて悟りに導かれた。菩薩は幾度も生まれ返り、法華經の教えを説いて人々を救い、その功德により仏となった。そう、常不輕菩薩は釈迦の前世の姿だったのだ。

宮澤賢治が「雨ニモマケズ」で記した理想の人間像「デクノボー」は常不輕菩薩がモデルで、「常不輕菩薩」という詩も書いています。さて、この常不輕菩薩のお話は、「礼」の面からみて、次のことを教えてください。まず、菩薩が人々の仏性に礼拝し続けて仏となったように、他者への尊重は自分を高めることでもある。また、人々が菩薩によって自分の仏性に気づいて悟りに至ったように、他者の尊重を受けた者は自分の尊厳に気づき自分を高めるようになる。こう見ると、他者を尊重し礼を重んじることは、自分と他者との双方を高める、自行化他の行為といえるでしょう。

礼には生活規範の意味がありました。仏教の生活規範といえ「五戒」があります。不殺生(殺生しない)、不偷盜(盗まない)、不邪淫(邪な男女交際をしない)、不妄語(嘘をつかない)、不飲酒(酒を飲まない)です。規範というと窮屈なようですが、規範は人のためにあるものです。人は規範を守ることで規範に守られるのです。仏教の規範(五戒)は至ってシンプルで、他の生命を尊重し、自らよい言動を習慣づけ、善い人間となり、社会と調和して生きることを目指すものです。

『論語』に「礼の用は和を貴しと為す」(学而篇)とあります。十七条憲法第一条の出典ともされ、「礼の作用・働きとして和の実現が最も大切である」という意味です。人間関係や社会の和を生み出す礼儀の大切さを改めて思います。

ウパーヤ学生編集員を募集しています

仏教教育広報誌「ウパーヤ」の紙面作りに参加していただける学生編集員を募集しています。

仏教、寺院、仏像、巡礼、歴史などに興味のある方、また取材や記事の執筆に関心のある方ならどなたでも歓迎します。当然、学部学科専攻も問いません。

これまで第4面の「聖徳太子のゆかりの地をめぐる」の取材の執筆、およびその取材見学の様子をホームページに紹介していただくなどの活動をしてきました。また、本学が仏教教育の一環として実施している野中寺での座禅会に参加し、その実施状況をレポートしてい



ただいたこともあります。

興味のある方、詳しい話を聞きたいという方は、第4面下に記載されているメールアドレスにメールを寄せていただくか、仏教文化研究所の연구원にお声を掛けてください。

ご連絡お待ちしております。

(奥羽充規)

第 13 回 卒業生インタビュー (下)

話し手：今西真喜 (いまにしまぎ) 昭和 44 年 3 月 四天王寺女子短期大学 保育科卒業生
 田中陽子 (たなかようこ) 昭和 44 年 3 月 四天王寺女子短期大学 被服科卒業生
 石井哲子 (いしいさとこ) 昭和 49 年 3 月 四天王寺女子短期大学 保健科卒業生
 聞き手：坂本光徳 (仏教 I・II 導師、人文社会学部人間福祉学科健康福祉専攻専任講師、本欄編集)

2017 年の大学 50 周年 (短大 60 周年) を記念して実施した卒業生インタビューの記念企画、卒業後も職員として長年本学に勤められた 3 名の方に集まっていた座談会の様子を前回に引き続き掲載します。

坂本：職員として勤められていた時の思い出について教えてください。

今西：在職中の思い出という本当に一生懸命に何を求めているかということを知って仕事をしていました。

石井：教育学科が開設され、男女共学になった時の受験生が凄く多かったこと、また、社会学科が開設された時も受験生が多かったことが印象に残っています。その対応に苦慮したことが思い出されます。

今西：現体育館 (旧運動場) に仮設トイレが設置されたことを覚えています。

石井：大阪では男女共学の教育学科は国公立しかなく、男子の受験生が凄く多かったです。

田中：その時に旧 4 号館 468 教室、ヨーロッパと呼んでいた、縦長で 3 段の階段状になっている教室がありました。そこで男女共学になって初めての受験風景ということで新聞社が取材に来てくれました。

今西：その頃は若くて色々なことで、動き回っていました。忙しかったけれど楽しかった時代です。

坂本：現在の大学生へ大先輩としてメッセージをお願いします。

田中：今頃の子はすぐにグループを作ってしまう、小心という欲望を抱くということがあまりないように見え、冒険心が少ないように感じます。自分の満足が高められたらそれで良いみたいに考えている節があります。何事においてもチャレンジ精神や探求心を忘れずに前に進んで行ってほしいです。

石井：私が短大に入学した時は、職業婦人を育てるのが四天王寺女子大・女子短大の教育目標の一つとしてありました。私も養護教諭になること

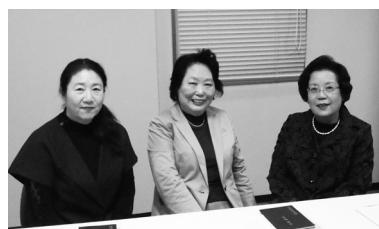
を目標に入学しました。それが男女共学になったことや時代の流れもあり、その教育目標が薄れていったように思います。女子大で自立した女性を育てるといった良い面もあったと思います。

在学へのメッセージですが、長い人生の中で学生として仏教とか礼拝の時間は少しの期間です。宗教に学生の若い時に触れるということは、人生にとってかけがえのないことだと思います。本学での礼拝はすごく意義あることなのです。社会人となった時やいつか人生が終わる頃には、あの時に般若心経を唱えて良かったな、写経して良かったなという思いが出てくるでしょう。勤めているとき、四天王寺学園のある理事の方に「歴史の中でいったら現在は点でしかない」と言われたのが印象に残っています。長い人生の中で学生時代の一年間の仏教の授業は点に過ぎず、仏教を通じて、これから楽しく、素晴らしい人生を送ってください。

今西：宗教を特色とした大学だったので、私は職員として在学の方より、長く宗教にふれることができました。このことを凄く幸せで嬉しく思っています。例えば、お地藏様参りをしても、何なく般若心経を唱えられますし、地域の中での読経も心の中にためらいもなく入ってきます。また色々な先生方の講話を聞かせていただいて、色んな知識もいただきました。今の学生の皆さんはこの大学にいるというだけで、大きな財産となることでしょう。キャンパスライフを大いに楽しんで過ごされ、何十年後かにそれが良かったと思える時がくると祈念いたします。

石井：学生時代はこんなことでも無駄とか、宗教にかかわらず色々なことが無駄と思うこともあると思いますが、生きていく上では全てが無駄ではなく、その中でも宗教は絶対に無駄にはならないと思います。

坂本：長く本学に関わり続けた皆さんの貴重なお話を聞くことができました。本日はお集りいただき本当に有難うございました。



左から石井さん、今西さん、田中さん (インタビュー時のもの)

平成 30 年度 夏学期「仏教 I」講話題目

- | | | | |
|----------|---|----------|---|
| 4 月 5 日 | 杉中 康平先生「受講ころえー授業規律に関して」
坂本 光徳先生「礼拝説明」
小川 和樹「学生運営委員会 新職員募集」 | 5 月 31 日 | 石田 陽子先生「歌うことは精進すること—なぜ私たちは聖歌を歌うのか?—」
中田 貴真先生・長谷川・西村・山本「アメリカ語学研修」
高橋 麻起子学生支援課員「受動喫煙の害—本学の禁煙支援」 |
| 4 月 12 日 | 岩尾 洋学長「建学の精神—『ころえ手帳』に寄せて」
坂本 光徳先生「授戒会オリエンテーション」 | 6 月 7 日 | 坂本 暁美先生「学園歌—作詞家と作曲家からのメッセージ」
恵木 徹待先生・安村・近藤「第 2 回ラオス・サービス・ラーニング・プログラム」
仲谷 和記先生「団体检血について」 |
| 4 月 19 日 | 坂本 光徳先生「理想—心を整える楽しみ—」
伊達 由実先生「大学生生活の心得」
藤谷 厚生先生「『ウバーヤ』第 12 号について、聖徳太子讃仰会について」
鷲尾・婦木・藤田・松浦・木下「ボランティア系クラブ団体合同説明会告知」 | 6 月 14 日 | 坂本 光徳先生「般若心経—空の教えから学ぶ—」
半田 アヤノ学生支援課員「朝食アンケートについて」 |
| 4 月 26 日 | 藤谷 厚生先生「四弘誓願文・懺悔文—限りなき願い・懺悔の心—」 | 6 月 21 日 | 矢野野 隆男先生「学園訓「礼儀を正しくせよ」について」 |
| 5 月 10 日 | 伊達 由実先生「学生アンケートについて」
大規模災害ワークショップ担当職員「本学の防災への取り組み」
「避難訓練」 | 6 月 28 日 | 南谷 美保先生「仏像を知ろう—仏様に会いに行くとは?—」
源 健一郎先生「羽曳野市ボランティア募集のお知らせ」 |
| 5 月 17 日 | 源 健一郎先生「開経偈・回向文」
高橋 麻起子学生支援課員「性感染症のお話—望まない妊娠を防ぐために」 | 7 月 5 日 | ロバート・ケリガン先生「Seeing Japan in the Eyes of a Foreigner—初めて日本を経験すること：外国人の立場からの感想—」 |
| 5 月 24 日 | 吉村 友泰「スポーツ大会告知」
成田 由枝子弁護士「学生生活に潜むリスク—犯罪・トラブルを回避するために知っておかなければならないこと—」
岡本・松村・上・吉村「水無月祭の告知」
山本・田中・増田「PITA 主催「勉強会」お知らせ」 | 7 月 12 日 | 上横 宏道先生「学園訓「誠実」について」
小川・上「大学祭のお知らせ」
山本・段野・山本・志磨「定期試験前勉強会のお知らせ」 |
| | | 7 月 19 日 | 杉中 康平先生「夏学期を終えるにあたって」 |

聖徳太子ゆかりの地をめぐる

一中宮寺（奈良県生駒郡斑鳩町）

誰もが知る法隆寺の東院に隣接し、静かな時間をはぐくむのが今回紹介する中宮寺です。中宮寺は聖徳太子が母である穴穂部間人皇后のために建てられた宮殿を寺に改めたものだとされています。元の宮殿は現在中宮寺が建っている場所より東におよそ500m離れた場所に国の史跡として残っており、南に塔を、そしてその北に金堂をかまえる様子は四天王寺と全く同じ配置だそうです。また、塔の礎は地中深くに埋められており、これは四天王寺や法隆寺、飛鳥寺も同様、創建された時代がとても古いことを表しています。

中宮寺は尼寺ということもあり、色彩豊かなお寺となっています。まず、本堂は亀やアメンボが住まう池の上に建っています。私たちが訪れた日は晴天に恵まれ、キラキラと輝く水面に本堂が映り込み、幻想的な風景を楽しむことができました。そして、池の周囲には山吹がぐるりと植えられています。まだ咲いていなかったのですが、咲き誇れば黄金の山吹と朱色の本堂とのコントラストは目を見張るほど見事なものなのでしょう。足元にはまぶしいほどの白砂が敷き詰められており、本堂や周囲の自然の色彩を際立たせています。

皆さんは「アルカイックスマイル」という言葉を聞いたことがあるでしょうか。古典的微笑とも言われ、優しく柔和に微笑む姿をあらわす言葉です。中宮寺の外観をじっくり味わい、いよいよと本堂に足を踏み入れたその先。エジプト



のスフィンクス、レオナルド・ダ・ヴィンチ作のモナリザと並び、「世界の3つの微笑像」としてアルカイックスマイルをたたえられる菩薩半跏像が本尊として安置されています。国宝にも指定されているこの像は、考える像として有名な半跏思惟（左足を垂れ、右足は左膝の上に置き、右手を曲げ、その指先で頬杖をつくようにわずかに頬に触れたお姿）、なぜこの像が「考える」お姿なのかというと、私たち人間をどうやって救おうかな、と物思いにふけられる慈悲深いお姿だからなのです。50円普通切手のデザインに5度も選ばれていることから、この像がどれだけの美と気品を備えているかは明らかでしょう。

中宮寺には、もうひとつ国宝に指定されているものがあります。それが天寿国曼荼羅繡帳という、日本最古の刺繍作品です。これは聖徳太子に関する歴史を語るには欠かせないもので、聖徳太子が亡くなられたのち、その死を嘆いた妃の橘大郎女が宮中の采女（身の回りの雑用をする女官）に命じて作らせた、というもののなのです。繡帳には、太子が後生を理想浄土の天寿国で楽しんでいる様子が描かれています。現在は一帳にまとめられていますが、もとは二帳からなるもので、そこに400字の銘文が刺繍で記されていました。その後、時が経つにつれて破損が進み、一時は所在不明になるものの、法隆寺の宝蔵で静かに眠っているところを発見されます。中宮寺に展示されているものはレプリカながら、染め物や織物、刺繍の世界で第一人者である人々が集まってプロジェクトチームを作り、6年がかりで完成した「昭和の国宝」と呼ばれるほどのものです。

目にも鮮やかで、かつ数々の歴史的な遺産を伝える中宮寺。大きく立派な法隆寺について目を奪われがちですが、少し歩いた先に確かに息づく、人々の聖徳太子への想いを感じ取ってみませんか。（学生編集員：三宅亜季）

仏教のことば

さんがく
— 三学 —

仏教では、釈尊の時代から仏道を修行する者が、必ず学び修めなくてはならない三つの基本的な実践徳目があります。これを三学とよんでいます。具体的には、戒学、定学、慧学の三つをさします。

戒学とは、守るべき戒律をさし、悪を止めて善を行うことを学ぶのです。この戒律には、在家者が守るべき五戒や八斎戒や、出家者が守らないといけない沙弥（若年の見習い僧）の十戒や比丘（正式な僧）の

二五〇戒といったものがあります。また定学は、禪定つまり精神を統一する実践であり、瞑想のことをさします。坐禅とか止観と言って、若干宗派によってよび方が異なりますが、様々な瞑想の実践が仏教にはあり、それらを修行して雑念を払い、心が乱れないようにする訳です。そして最後の慧学ですが、これは静かになった心で、正しく真理とは何かを観察し、真実の姿を見極める智慧を完成するように努めることをさします。この智慧の完成が、仏教での究極的な目標になる訳です。

このように、まず戒学の戒律をしっかりと守り、さらに定学を実践して精神の統一を図り、智慧の完成、真理を悟る慧学の成就へと向かうというこの三学の実践が、実は仏道修行の根幹となっている訳です。（藤谷厚生）

編集後記

今号では、巻頭エッセイとして経営学部長原田保秀先生にインテグリティ（誠実さ）について、教育学部小学校・幼児保育コース主任石田陽子先生からは善く生きることと仏教の実践について、また、第2面では人文社会学部長の矢野野隆男先生から学園訓「礼儀を正しくせよ」についてご執筆いただきました。どのお話も私達の生活に示唆を与えるものと思います。

第3面の卒業生インタビューでは、前号に引き続いて、永年にわたり本学に勤められた今西真喜さん・田中陽子さん・石井哲子さんより学生時代を振り返りつつ、本学で学ぶ後輩学生への貴重なアドバイスを頂きました。

第4面では、中宮寺について学生編集委員の三宅亜季さんが紹介してくれました。一度参拝されてはいかがでしょうか。次号もご期待下さい。（H.U.）

研究所員紹介

所長	岩尾 洋(学長・教授)
主任研究員	藤谷 厚生(教授)
研究員	上綱 宏道(教授)
	源 健一郎(教授)
	南谷 美保(教授)
	矢野野 隆男(教授)
	奥野 充規(准教授)
	杉中 康平(准教授)
	坂本 光徳(専任講師)
	中田 貴真(専任講師)
	南谷 恵敬(客員教授)
客員研究員	桃尾 幸順

UPAYA(ウパーヤ) 13号

ウパーヤとは「高い目標へ到達すること」を意味し、漢訳では「方便」となります。

平成30年9月1日発行

発行 四天王寺大学

仏教文化研究所 仏教教育センター

所在地 大阪府羽曳野市学園前三丁目2-1

TEL:072-956-3181(代) FAX:072-956-0611

URL:http://www.shitennoji.ac.jp/

「UPAYA(ウパーヤ)」に関する
ご意見やご感想はこちらへお寄せください。
E-mail bukken@shitennoji.ac.jp
(件名は「ウパーヤ」としてください)

